

都道府県・指定都市番号	44	都道府県・指定都市名	大分県	研究課題番号・校種名	2 (4) 中学校
				領域名	E S D
研究課題	<b>学校全体で取り組む研究課題</b> (4) E S Dを学校全体で体系的に推進するための教育課程の編成, 指導方法等の工夫改善に関する実践研究				
学校名 (児童・生徒数)	佐伯市立宇目緑豊 中学校 (53人)				
所在地 (電話番号)	大分県佐伯市宇目千束1560-1 (0972-52-1016)				
研究内容等掲載ウェブサイトURL	http://tyu.oita-ed.jp/saiki/umeryokuhou/				
研究のキーワード	ESDカレンダー 地域・保護者との協働 批判的な思考力				
研究結果のポイント	<p>○総合的な学習の時間やその他の教科・領域で地域の人々をつなぎ, その活動に興味・関心を持ち, 考え, 行動へとつながる態度の育成を目指す。</p> <p>○「批判的に考える力」や「コミュニケーションを行う力」等のE S Dの視点に基づいた力を育む。</p> <p>○地域・家庭との協働により, E S Dに対する意識を高めることで, 様々な活動がE S Dにつながることを知らせ, 持続可能な社会づくりに関心を持たせる。</p>				

1 研究主題等

(1) 研究主題

「批判的な思考力」等を地方創生のエネルギーとするE S Dの推進
----------------------------------

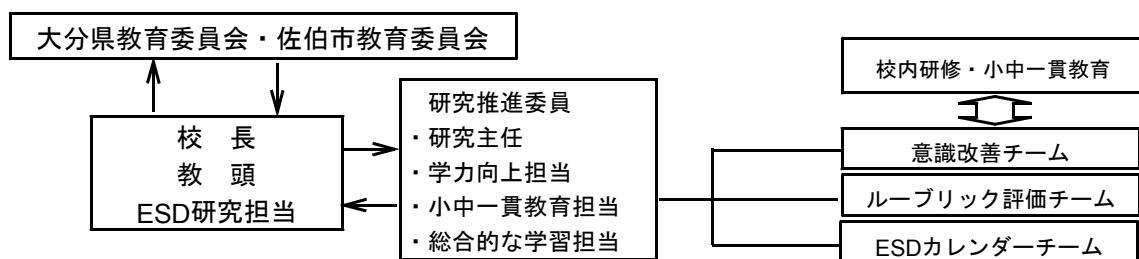
(2) 研究主題設定の理由

これまで総合的な学習の時間において, 伝統芸能の継承や地域人材による出前授業の実施等, 地域とのつながりを重視した取組を進めてきた。しかし, 生徒自身で地域の課題を見だし, 地域と協働しながら課題解決まで至った学習は少なかった。

そこで, 改めて地域の歴史や文化, 自然等を見直し, 地域の素晴らしさとともに課題を見だし, 地域の人々と協働しながら課題解決を図ることとした。地域の歴史や文化, 自然等を見直すことは, 地域活性化を促進し, 持続性に貢献することにつながるのではないかと考えている。

そのため, 年間指導計画にE S Dの視点に立った学習を位置付け, 各教科等でこの目標の達成を図るための学習を展開することで, 生徒に持続可能な社会の形成者としての価値観を育成したいと考えた。その価値観の基盤となる, 「ものごとを思慮深く建設的に, 常に代替案の可能性を探りながら協調性を持って思考・判断し, グローバルに考え行動する力」(以下, 本校で言うところの「批判的な思考力」)を育成することをねらいとした。そして, その「批判的な思考力」が, 地域貢献や地域活性化へのエネルギーになることを期待して, 本研究主題を設定した。

(3) 研究体制



(4) 1年間の主な取組

平成28年度	5月	E S Dの理解…生徒・保護者への広報活動	生徒へのアンケート調査①
	7月	自然体感キャンプ実施 ユネスコエコパークとの関わり	
	7月	教職員対象のESD研修 (福岡教育大学 石丸哲史教授, 国立教育政策研究所担当官招聘)	
	8月	小中一貫教育・小中連携による研修会 (東京学芸大 成田喜一郎教授招聘)	
	9月	第2学年社会科「世界から見た日本の資源・エネルギーと産業」 各教科等における「批判的な思考力」等を育成する指導 (石丸哲史教授招聘)	
	10月	A P U立命館アジア太平洋大学の学生との交流 (多様な価値観を理解できる生徒の育成)	
	11月	授業提案 (小中一貫教育校公開研究発表会：6年次) 第3学年総合的な学習「宇目の未来を考えよう～20年後の宇目の未来～」 (地域人材を活用した総合的な学習の時間の展開について)	
	1月	生徒及び教職員アンケート調査②	
	3月	成果と課題に関わる資料等の作成, 次年度の組織計画の検討 教職員対象のESD研修「1年次のまとめ」(福岡教育大学 石丸哲史教授招聘)	
	年間	○各教科等におけるE S Dに基づく授業改善, 評価計画の作成及びESDカレンダーの付加・修正, 生徒の意識改善アンケートの実施	

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

ESDの視点に立った学習指導の目標を教育課程の編成に生かし, 接続する小学校及び高等学校等と連携し, 「批判的な思考力」等の育成を要とした体系的な指導と評価を行う。

(2) 具体的な研究活動

① 各教科等における「批判的な思考力」等を育成する指導について

(ア) 各教科等におけるE S Dの視点に基づいた年間指導計画の作成

- ・ E S Dの視点に基づき, 教科横断的な単元指導計画, 年間指導計画を編成し, 各学年のE S Dカレンダーを作成した。

(イ) E S Dでの付けたい力を提示し, 以下の項目でまとめた。

- ・ E S Dと関わる項目  
「環境・エネルギー, 防災」「生物多様性」「国際理解」「世界遺産や地域の文化財」
- ・ 身に付けたい力として  
「批判的に考える力」「未来を予測して計画を立てる力」「多面的, 総合的に考える力」  
「コミュニケーションを行う力」「他者と協力する態度」「つながりを尊重する態度」

② 各教科の授業でペア・グループ学習を活用した効果的な指導方法について

(第2学年社会科「世界から見た日本の資源・エネルギーと産業」の指導事例)

【1】多様な情報を活用して協働的に学ぶ】

【2】異なる視点から協働的に学ぶ】

自己の考えを持ち, 主体的に学習に参加する。

自他の考えの異同から, 自分の見方・考え方を広げる。



ワークシートを基に自分の考えを書き込み, その後, ペアで意見交換しながら, 考えを深めていく様子



班で意見を出し合う中で, 相違点をホワイトボードにまとめている様子

【3】力を合わせたり，交流したりして協働的に学ぶ  
考えを統合させ，深い学びにつなげる。



全体の交流  
とともに，ペ  
アでも考えを  
確認している  
様子

③ 多様な価値観を理解できる生徒の育成について

外国人等との連携や世代の違う人々との交流を推進し，グローバル社会に対応できるベースを育むために，APU立命館アジア太平洋大学の学生との交流を実施した。

【生徒の感想】



私は英語でたくさんの人と会話することの楽しさを知りました。みんな笑顔で接してくれて，様々な文化を知ることができ，今後もコミュニケーションを図っていきます。またAPUを訪問したことで3学期の英語弁論への意欲にもつながりました。自分で伝えたいことを英語にして全体に伝えるということは楽しいし，よい経験にもなるのでたくさんの人とコミュニケーションを図ってみたいです。

④ 地域人材を活用した総合的な学習の時間の展開について

第3学年総合的な学習の時間「宇目の未来を考えよう～20年後の宇目の未来～」

(地域人材を活用した総合的な学習の時間の展開について)



自分たちが住んでいる地域の将来について，地域振興局や市役所のまちづくり推進課の職員，地域おこし協力隊の方から聞き取りを行った。その意見も参考にして，3つのグループに分かれて「未来のまちづくりについて考えた計画」についてポ

スターセッションで発表した。授業では，地域の方も招待していたので，様々な意見を聞くことができた。

E S Dの視点から見える授業の成果と課題

【成果】

- ・自分たちの取組を地域に発信することで，地域の思いを知ることができた。また，行政関係者の話も聞くことで，「今，できること」「これから取り組むべきこと」を知り，学校が持続可能な地域づくりの中心に位置付いていることを，生徒は程度の差こそあれ，体験を通して実感することができた。
- ・他の班の発表について，自分たちの班との共通点や差異，さらに調査すべきことがあるのか等の視点で考えられるようになってきた。

【課題】

- ・「探究のスパイラル」に基づいた探究をより深めることがあげられる。そのために生徒同士互いに問いを出し合ったり，議論し合ったりという活動の一層の充実
- ・地域との活動を通して学校，あるいはそこで学ぶ生徒が持続可能な地域づくりの中心に位置付いていることを引き続き実感させていくこと

⑤ 地域や家庭との連動した取組

(ア) E S Dへの保護者理解を進める

- ・保護者への説明会を実施し，E S Dに関わる項目を例に出しながら，様々な教育活動がE S Dにつながることを説明した。その後，「E S Dの愛言葉」をキャッチフレーズとして設定，掲示することで，E S Dを身近に感じさせるように取組を進めた。

(イ) 地域の人々や行政との関わり

- ・「祖母傾山系ユネスコエコパークの国内推薦」を目指す行政と連携して、自然体感キャンプを実施した。地元出身で世界的なアルピニストでもある戸高雅史氏を講師として迎えることができた。地元の自然の豊かさや素晴らしさを感じさせると共に、自然との共存の大切さを学ぶ機会となった。

⑥小学校及び高等学校との連携

- ・連携型の小中一貫教育に取り組む隣接する小学校とともに、研究6年次の発表会を行う中で、小学校の職員と共にE S Dについての学びの場を持つことができた。研究発表会では公開授業を実施し、前期(小1～小4)、中期(小5～中1)、後期(中2・中3)の発達段階に分けた学びの場を設定し、本年度は中期の取組として合唱の授業公開を行った。複数の学年集団に対する中1の生徒のリーダーシップの向上が見られ、「コミュニケーションを行う力」を発揮する取組となった。
- ・高等学校との連携としては、現在学校担当者と意見交換を行っている段階であり、今後E S Dの視点を持ち、取組を推進していくことを確認している。

### 3 研究の結果と今後の取組

(1) 研究の結果

<成果>

- 総合的な学習の時間等において地域の人々とつながることで、中学生としてふるさとを思う気持ちを醸成することができた。このうち特に、行政(佐伯市)との関わりの中では、今自分たちができることは何か、行政に提言できる部分はないか等の発信に向けた取組を進めることができ、地域への興味・関心が行動へと結び付く端緒となった。
- E S Dの視点に基づいた教科横断的な年間指導計画(E S Dカレンダー)を踏まえた取組により、行事の精選とE S Dの視点に基づいた具体的な活動を取り入れることができた。また、組織的に「批判的に考える力」や「コミュニケーションを行う力」等の育成を検討したり、キャリア教育や環境教育の視点を取り入れた総合的な学習の時間と各教科等に関連付けるなど、カリキュラム・マネジメントの重要性を確認することができた。
- 生徒が、E S Dの視点に基づいた地域・家庭との協働による諸活動の積み重ねにより、学ぶことと社会のつながりを意識し、グローバルな視点を持つことができるようになってきており、持続可能な社会づくりについての関心を深めることができた。

<課題>

- 各教科等で、主体的な学びの保障をしているが「付けたい力」に即した評価には至っていない。E S Dにおける授業改善や評価の在り方はどうあればよいかを引き続き検討する必要がある。

(2) 今後の取組

上記の課題を受けて、29年度は大きく以下の2点について研究を進めたい。

- 「深い学び」に向けて生徒自身の内面を見取りながら、E S Dの成果をモニタリングできるように評価の方法を改善していく必要がある。各教科等の特質に応じた「付けたい力」に即した評価について改善を図りながら、E S Dの視点に基づき、教育課程の編成を行う。
- 生徒自身がE S Dの視点を持って自己の生活を見直し、振り返る取組を充実させ、E S Dの視点に基づいた授業改善を行う。「このままでいいのか」「もっとこうできないだろうか」といった疑問を自己に問いかけ、現状を見直すことができるような意識を生徒自身に培い、地域貢献や地域活性化に向けた意欲の醸成につなげていきたい。